

恵美子さんのがん闘病記



「まさか、自分が」

恵美子さん（50歳）が2年ぶりに受けた会社の健康診断のバリウム検査で「胃潰瘍の跡がある」と言われたのが昨年の7月。ストレスから橋本病になっており、吐き気や腰の痛みの自覚症状はあつたものの橋本病のせいだろうと思つていたそうです。埼玉の地元の病院で胃カメラ検査により胃がんが発見されました。知人の紹介で築地の国立ガンセンター中央病院に入院したのが8月10日です。7月26日～8月10日まで1日置きに日帰り検査、8月13日に手術して（手術所要時間は3時間半）みぞおちからヘソの手前まで切り、胃と脾臓を全摘致しました。

「開けてみないとわからない」

がんには「ステージ」というものがあります。がんの進行具合や深さ、転移の状態です。ステージ（病期）I A・I B・II・III A・III B・IVがきます。Iは胃がんが胃の壁のどこまでの深さですんでいるか示しています。（深達度）

恵美子さんの手術前の所見はステージIでしたが、手術後はステージIIで

深達度T3（漿膜を超えて胃の表面にでている）で胃がんが深くまですすんでいてもリンパ節に転移していない状態でした。脾臓の摘出はリンパ節への転移を防ぐ為に行われました。

「歩くことが一番のリハビリ」

術後の翌日から歩くように言われ、食事はまずは1日1本のミネラルウォーターを飲むことから始まり、おもゆから七分がゆになったのは1週間後でした。口で胃を補う。胃がなくなったことで消化液は唾液と腸液だけになるので、消化を助けるためにもよく噛み唾液と混ぜて消化を助けなければなりません。よく噛んで食べる習慣がなかったので、これは慣れるまで大変だったようです。

「盲腸とるようなものだった」

恵美子さんの場合は、全く他にがん細胞が染み込んでおらず、抗がん剤も放射線治療もせずに済みました。術後は傷口を塞いでいたテープは3ヶ月で取れ半年後には痛みも取れ職場復帰しました。食物や飲料が小腸に急激に流れ込むために、食事後に腹痛、吐き気、下痢あるいはめまいを引き起こすダンピング症候

群が時々起きますが、今は半年に一度の検査だけです。

「自分の身体を」

仕事人間だったけど、今は自分の時間を大切にストレスを抱えないようにしている恵美子さん。

がんは細胞のなかのDNAが傷つくと「がん細胞」になり、実は健康な人でも1日5千個のがん細胞が発生しています。がん細胞ができるとそのつど免疫細胞（リンパ球）が退治していますが、年齢を重ねたり生活習慣などによりがん細胞の発生が増え免疫細胞の機能が落ちてきてがんになります。日本人の3人に1人はがんで亡くなっており、将来は2人に1人はがんで亡くなると予想されています。

「お医者さんとの出会いが大切」

がんは開けて見ないと人それぞれに違います。とっさの判断が早く適切な処置をしてくれるお医者さんとの出会いによって運命も分かれます。がんになったら入院費がいくらかかるか、病院によっても違います。情報は口コミだけではかからないのが現状です。

「自分の身は自分で守る。」
どうか、ご自愛下さい。

